

日本聖公会
ウイリアムス
神学館ニュース

2022年
第111号

The Bishop Williams
Theological Seminary NEWS

日本聖公会京都教区
発行・編集人：黒田 裕
〒602-8011
京都市上京区桜鶴岡町380
TEL：075-431-5406
FAX：075-431-5445
williams@muc.biglobe.ne.jp



ご挨拶

司祭 テモテ 土井宏純

この挨拶文を書く段になっても、未だこの事態を十分に受け止め切れておりませんが、この1月から急遽「法憲法規」(集中講義)を担当することになりました。よろしくお願いいたします。

昨秋の11月5日、長年に亘り神学校において「法憲法規」を教導してこられた浦地洪一司祭が主の御許に召されました。神学校のみならず、日本聖公会(管区)の法憲法規委員会においても、これまで議論に窮するたびに浦地司祭にご助言を求めてきました。私自身は委員会の末席に身を置く者に過ぎませんので、直接の面識はありませんでした。2012年に浦地司祭が編集、刊行された『日本聖公会宣教150年の航跡』には、日本聖公会の歴史を振り返る上で幾度となくお世話になってきました。そのような唯一無二の存

在であった浦地司祭の後任として、「法憲法規」の講義をまさか私が引き継ぐことになるとは想像することさえできませんでした。

私は大学及び神学校(聖公会神学院)で多少神学をかじりましたが、「法憲法規」の講義を受けた記憶はありませんし、勿論専門性も全く持ち合わせておりません。神学校卒業後は、新潟県、愛知県、長野県の各教会で、約30年間牧会のみに従事してきました。なぜそのような私に声が掛かったのか不可解でなりません。この話を頂戴して一つだけ頭に浮かんだことがあります。それは、私の神学校時代の恩師(校長)であり、その後ウイリアムス神学館の館長も務められた森紀旦主教の言葉です。「あなたの賜物を活かすためにも、神学書に親しむことを大事にしよう。様々な人々と出会い、話し、食し、飲み…という姿勢を第一義的な喜び、楽しみ(牧会観)とし、しかしときにそこに逃げ込

道を伝えて

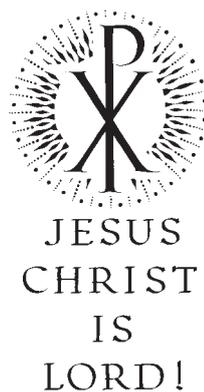
「人は人 吾は吾なりとにかくに 吾が行く道を 吾は行くなり」
(西田幾多郎)

私はこの3月で51歳になるが、振り返ると我ながら寄り道の多い人生だったと思う。寄り道というからには本道があるはずだが、私の場合は何が本道かさえ分からないくらいである。子供の頃から寄り道が好きだった私は、ある日、塾の帰りに悪友と一緒にかなり大胆な寄り道をした。といつても子供のことだから本屋やゲームセンターに寄った程度だが、さすがにその時は父親にひどく叱られた。しかしその日に悪友と食べたタコ焼の味は今も忘れられない。あの寄り道が

うとする私の弱さを森主教は見透かしておられたのだと思います。そうであるならば、体力の衰えを痛感する昨今ではありますが、自分自身も神学生の一人に立ち返り、フレッシュな気持ちで神学生の皆さんと「法憲法規」を共に学ぶ機会と捉え、想定外の働きの中に、

何かしらの深い意味があることを信じて楽しみたいと思います。

(どいひろずみ 本館法憲法規教授)



なかつたら私の塾通いの思い出はないに等しい。大人になってからも人生の寄り道を何度もしてきたが、もし私が本道しか歩んでこなかつたら思い出と呼べるものも僅かしかないだろう。道を伝えるということとは本道を示すことではなく、一見無駄のように思える寄り道が実は人生を豊かに彩るものであることを身をもって知り、その生きざまをそのまま見てもらい、誰のものでもない自分の道を歩んでよいのだと教えていくことだと思う。「あらゆるキリスト者の生がひとつの証となる」というカール・バルトの言葉を私自身もこの歳になって実感している。

(濱崎雅孝はまさきまさたか 本館神学基礎演習、教理学教授)

浦地洪一司祭をお見送りする ステパノ 高地 敬

昨年11月、法憲法規の集中講義を担当していただいていた浦地洪一司祭が逝去されました。日本聖公会の法憲法規委員会に長く関わられ、「教会の法規」に最も造詣の深い方としてお願いをしてきました。法規本文はともかく、末尾の書式集はほとんど浦地先生の手にな

るものだと思います。「書式は法規そのものではないから、適当に変えてもらっていいのです」と伺ったことがあります。

み言葉を宣べることに心血を注がれ、また、何事もきちんとした方だという印象が強いのですが、変えていいもの、良くないものがはつき

りしていて、法規を扱う人の態度としてとても大事なことだったと思います。ただ、何を変えてはいけなか、人と意見が違う面もあったのではないのでしょうか。

そのような方でありましたが、30年以上前、私が神学校卒業後に赴任した金沢の教会の主日礼拝に月1回、浦地先生に来ていただいております。ある時お連れ合いとお

嬢さんと一緒に車で来られて、日曜の午後デパートに行かれ、大きなキーボードを買ってこられました。「京都で買ったらええんやけど、衝動買いやわ」と楽しそうに言っておられました。

浦地先生に感謝しつつ、何でもきちんとし、そして自分の気持ちも大事にするということだったかと思っておしております。

2021 東北研修 ―感想編―

本紙前号で予告してしました通り、東北研修(2021年11月11日〜14日)に参加した神学生たちの感想をお送りします。今回の体験学習が今後の牧会と宣教のヴィジョンを描くことへと繋がっていきますように。

「いい」というお言葉が共通しておられたように感じました。私自身、震災から10年が経過し、離れた地にいると、震災を過去の出来事や終わったことのように考えていたと気付かされました。

今後は震災後の出来事を傍観せず、東北の方々と関わっていき、自分で出来る事は小さなことでも取り組んでいきたいと思えました。そのためには、どのようにすればよいかと考えた時、84名の児童・教職員が津波の犠牲になった大川小学校で話して下さった佐藤敏郎さんの「ここには、私の娘たちの命があり、笑顔があった事を想像してほしい。」という言葉が思い出しました。ニュースやネット記事での「できごと」を見聞きするだけでなく、人と人の関係に「楽しい、嬉しい、悲しい、苦しい」などの感情が伴うよう

に、そこにいる人の気持ちに思いを馳せていきたいと思えます。そして、イエス様の愛に思いを馳せ、自分の周囲にいる、困難中にある方々、苦しみや痛みを抱えている方々、不条理を強いられる方々の思いにも寄り添うことを大切にしたいと思えます。

なった。震災発生直後から企業主体の支援組織をはじめ様々なボランティア団体、NPO/NGOが活動を開始し今に至っている。それら組織と聖公会の違いには、「昔からそこにある」ということ、「そこで暮らし活動し続けてきている」として「これからもそこにある」ということがある。地域とか状況に沿った形での宣教的な働きがあり、現地の教会は、この10年間、おかれている場、状況にコミットすることを考えてきたのである。全国組織である聖公会は、それぞれの地域ごとに基盤を持ち、教会を中心にそこで暮らし活動している。教会・地域を中心しながらも全国規模での関わり／共有が可能となる、力ある組織なのである。この力は、様々な問題に対して実践する母体になることもできると思う。今回の研修は、教会の存在、

思いを馳せて

九州教区聖職候補生
3年 ダビデ 佐藤 充

研修にあたり、様々な準備、支援をして下さった皆様に感謝を申し上げます。

今回、証言をして下さった方々のお話の中で「関わり続けていってほ

東北研修を振り返って

横浜教区聖職候補生
2年 ステパノ 高野 洋

研修のテーマ「いま『宣教・牧会の10年』を問い直す」に関して、ちょうど10年前に、前職で環境・社会貢献領域を任せられ震災関連業務を推進していたことが思い出された。社内からボランティアを募り自らも宮城県気仙沼に伺った。あれから10年後の今回、神学生としての訪問と

宣教・牧会の価値を、自分事として視て聞いて考える機会になった。震災から10年という節目の年に被災地を訪れ、現地にて主要な方々から直接お話を伺うという貴重な機会を頂いた。ご尽力頂いた東北教区の皆様に感謝申し上げます。

東北研修を振り返って

京都教区聖職候補生
2年 サムエル 藤井 和人

東北研修を振り返り、心に残ったことを二つお話させていただきませう。一つ目は、「カリタス南相馬」の山田雅之さんにガイドをいただき、東京電力福島第一原子力発電所周辺地域のトリップに赴いたことです。車での移動中、車窓からは、山積みになった放射性廃棄物が何度目にも留まりました。また帰宅困難区域では、道路が封鎖され、家屋は震災当時のまま残っていました。まるで時が止まっているかのような光景を目の当たりにして、東日本大震災はまだ終わっていないことをひしひしと感じました。一つ目は、被災された方々がその生々しい経験談を私たちにお話してくださったということです。今回の東北研修の鍵語である「傾聴」とは、単にお話したくないことを理解しようとするこののみならず、むしろそれを自分自

身の中でどのように受け止めることができるのか。このことを学んだように思います。南三陸町で津波から奇跡的に生還された鈴木清美さん、津波でご息女を亡くされた「大川伝承の会」の佐藤敏郎さん、そして教会の再建に尽力された磯山聖ヨハネ教会の三宅信一さんのお話の中で、特に強調されていたことは、たとえこの事態を一変させる大きな力がなくとも「今できることをやってみよう」ということでした。そして私たちに向けてお話をくださったこと自体、まさに「今できることをやってみよう」その表れであるのだと感じました。そのお姿から、私自身このこれからの生き方に大きなヒントと勇気を頂いたように思います。

希望の牧場の「希望」

京都教区聖職候補生
2年 ダビデ 梁 權 模

今回の東北研修では様々なことを学び、記憶に残った場所が多かったが、その中でかなり印象的だったのは「希望の牧場」であった。牧場については以前、私が希望の牧場に関する絵本の朗読を聞いたことで名前は知っていた。牧場に到着したとき、ガイドをしてくださった山田さんから長く滞在することができないと聞いたが、その通りに線量計

の数値が高くなっていた。

しかし、そのような数値とは関係なく、牧場の空は澄み渡るように青く、また風景はものすごく穏やかな牧歌的雰囲気で、しかも自分たちが放射線に被爆したことを知らないかのように餌を食べる牛たちの姿は平穏であった。まるで不条理劇の一場面を見ているような気持ちであったが、牧場の名前である「希望」について思いめぐらす中で、一つのことには気づいた。

牧場内の牛たちは商品価値がゼロになった個体が多い。しかしそのような牛たちの命が粗末に扱われることなく、むしろ餌を食べ、牧場を自由に歩きながら寿命となる時まで生かされている。そのことから、希望の牧場は「価値のないと見えるものにも、その存在だけで価値がある」ということを「希望」として伝えていくのではないかと思うようになった。今回の東北研修を通して学んだことを私は今後の働きにおいて大事にしたい。

3つの「か行」…「記録」と

「傾聴」、「景色」の狭間で

京都教区神学生
1年 クララ 小野 恭子

今回の東北研修にあたり、私は

「記録担当」となった。所要所で写真を撮り、画像による記録を残すという役割である。館長をはじめとするスタッフ、そして他の神学生と共に東北の地に降り立った私は、「記録」係の役割に徹しようと持参したスマートフォンのカメラを構え、必死にシャッターを切り続けた。

1日目、2日目とプログラムが進むにつれて、心に迷いが生じた。「記録」に徹しようとすればするほど、今、ここでしか聴けない語り部さんのお話に集中できなくなる分が分かったのだ。耳を傾けて一心に聴くこと―傾聴と、目の前に広がる東日本大震災の爪痕を写すには今の時しかない―記録。この「傾聴」と「記録」という平均台の上を歩いているような感覚に、どうしたら良いか判断に迷うことが多々あった。

3日目。南相馬を走る車の窓から見える、澄んだ青空と木の葉の美しさに目を奪われた。車から降りて写真を撮りたかったが、10年経った今でも放射線量が高いため、車外に出られない。美しい「景色」が震災の爪痕の残酷さを静かに物語っているように思った。

使える語彙が少ない私が今書けることは、自分が見聞したこと、「実際に被災地に行って見てくださる」のみである。

3年間の学び

九州教区聖職候補生
3年 ダビデ 佐藤 充

私が好きな「LYRE(リラ)」という賛美グループの歌に、「空」という曲があります。歌詞に「本当の自分の愛の無さに気が付いた時、弱い自分が悲しくて涙が出た。」とあり、ハッとさせられます。リラは、現在、牧師や宣教師等をされている方々が、東京基督教大学の神学生だった頃に結成されました。先ほどの「空」は、神学校の寮生活の中での体験や葛藤から出来た曲だそうです。私も、この3年間、勉学での学びに加えて、寮生活での様々な学びがありました。年齢も出身地も異なる者同士が、同じ屋根の下で暮らすので、色々な事が起こります。そんな中、

同窓会通信

2002年3月に神学館を卒業して今年で20年になります。振り返ると濃密な3年間を過ごさせて頂きました。「道を伝えて己を伝えず」の校訓はいつでも私の中にあります。ニコルス館での寮生活も思い出せばたくさん思い出があります。京都の夏の暑さには参りました。2階と3階の階段には気温の差を感じる層があつて3階はエアコンをつけな

昨年の夏、数年ぶりに「ウイリアムス祭」という寮祭が行えた事は良い経験となりした。授業で忙しい合間を縫って、何回も学生同士で話し合い、時には衝突し、時には励まし合いながらの準備は大変でしたが、みんなで一つのものを作り上げる過程で、多くの学びがありました。これらの経験を糧に、遣わされた教会でも、様々な方と語り合い、共に祈り、共に歩んで参りたいと思えます。3年間の学びをお支えくださった皆様と、導いてくださった主に感謝を申し上げます(写真は、出島聖公会神学校跡の前で、明治期の神学生を思い浮かべて)。



と過ごせませんでした。涼を求めて館内を動き回っていました。神学生同士で部屋を行き交いながら楽しく?時に熱い議論を夜中まで話してこむことも度々ありました。3つの「S」という言葉を教えて頂きました。「Study」(学び)、「Service」(礼拝)、「Say Hello」(訪問)、この3つを教役者は日々大切な柱としなさいという教えでしたがまさに神学館での3年間は3つのSの大切さを徹底的に教えて頂いたと思います。こ

神学館で聴講しませんか?

聴講科目が広がりました!

毎年行われていますウイリアムス神学館の聴講制度。この4月からは新たにギリシャ語I、ヘブライ語Iといった語学も受講可となりました。どの科目も試験やレポート、成績評価なしで受講可能です。ぜひチャレンジを!お申込みをお待ちしております。

【来年度の聴講科目と担当教員】

ギリシャ語I(高地敬/京都教区主教・理事長)、英書講読(黒田裕/京都教区司祭・館長)、教会史(岩城聡/大阪教区司祭)、旧約入門(勝村弘也/神戸松蔭女子学院大学名誉教授)、新約入門(前川裕/関西学院大学准教授)、旧約釈義(勝村弘也)。

の3つのバランスを保っていくことが大切だと思います。コロナ禍になつて人と会うこと、自由に行き来することが困難な状況にあります。ご提案ですが、こんな時だからこそWEB同窓会を計画しませんか?また、神学館の授業や講演などオンラインで聴講が可能になれば大変嬉しいです。母校の上に主イエス様の祝福が常にありますようにお祈りいたします。(司祭 越山哲也/盛岡聖公会牧師)

新約神学(嶺重淑/関西学院大学教授)、教理学I(岩城聡)、教理学II(濱崎雅孝/関西学院大学ほか非常勤講師)、聖公会論(林和広/神戸教区司祭)、礼拝学I(越川弘英/同志社大学教授)、礼拝学II(林和広)、教会音楽(辻彩乃/川口基督教教会信徒)、ヘブライ語I(宮田玲/同志社大学ほか非常勤講師)

聴講料は1科目45,000円(年額)、詳しくは各教会にお届けしています聴講案内をご覧ください、メール、ファクスまたは郵送でお申し込み下さい。

申込締切: 4月9日(土) 必着
(X)切が迫っている時は電話でも結構です。後日申込書をご持参下さい)

2022年度

「今さら聞けない!」講座は

「キリスト教的生き方編」

担当: 濱崎雅孝先生

(本学教授 関西学院大学他非常勤講師)

【日時】年10回

土曜日: 午後2時~午後3時30分

4月30日、5月21日、6月11日、

7月16日、9月24日、10月22日、

11月19日、1月28日、2月25日、

3月25日

申込締切: 4月22日(金)

詳細はチラシ・HPを御覧ください。